



大もの ゲットで!! 今年を締めくくる!!

ボリウム満点のウチダザリガニは、トラウトにとって絶好の捕食対象。これを意識したルアー選択がカギを握る

穏やかに冬眠 するために……

秋・冬は、私欲を満たさず本流に通う。夏は「趣」を重視して溪流で遊び、秋は「欲」を満たすために本流に向かうのが、近年の僕の定番スタイル。この時期、本流に通うのは、これから迎える河川の長い冬眠シーズンをストレスなく迎えたいから。そのために胸をすくような爽快感と、お腹一杯になるような達成感がどうしてもほしい。たとえすべてが目標が達成できなくても、何かしら満たされないと、最近のヒゲマと一緒に満足に冬眠などできない。

本誌70号でもふれたが「最高にフアイトする魚を釣りたい」「ビッグクリするようなサイズを掛けたい！」

と願うなら、やはり規模の大きな本流に生息するパワフルなニジマスが最高の相手。特に石狩川・天塩川・十勝川、この道内3大河川は格別だ。河川ごとに魚体やフアイトの質は異なっても、とにかく馬力があることで共通する。サイズ(長さ)が同じでも、溪流と本流の魚とは重さや体型、そしてフアイトは別ものだ。小規模河川の50〜60cmは6フィートのライトアクションロッドに6ポンドクラスのナイロンラインで充分勝負になっても、本流はそうはいかない。40cm台でもドラッグを「ギューン」と掻き鳴らして開けた川面を跳ねまくり、速く長い瀬を一気に疾走する。中型サイズでも冷や汗を掻くほどだから、60cmオーバーが掛かると「ヤバイ、ヤバイ……」が連発する。



初日は強い濁りを前に気持ちが折れそうになったが、ふとしたきっかけからのルアーチェンジが幸運を呼び込んだ

低活性か底生生物か……

スプーンの底力は輝かずとも

一番人気はミノ、スプーンならキラキラ系。それが近年の本流デカニジ釣りのトレンドだが、10月上旬65cmを頭にグッドサイズが口を使ったのはすべてダークカラーのスプーンだった。これまであまり注目されることがないタイプがヒットに結びついた要因は何だろう。

文 福士知之(千歳市在住)
Text by Tomoyuki Fukushi

2日目の朝イチ、フラットな流れから待望の1尾目をランディング



見事な体高を誇る50cm。魚体が見えた瞬間はロクマルクラスに思えた



上は全長100mmのミノー。ハサミだけでこの長さなのだから、胴体を含めたら相当なアカさ。こんなものを食ってれば、肥満体型になるのは当然か(上) ヒットルアーはD-3カスタムルアーズ「D-3カスタムスプーン10g」のウチダザリガニカラー(右)



濁りの影響

秋〜冬は状況変化が大きい。昨秋の取材では、目前で「モッコ」とライズを繰り返す大ものを相手に、あの手この手で挑むも、結局なす術なく不完全燃焼に終わった。今年こそはと意気込んで10月上旬、カメラマンと合流したわけだが、向かった川は前日までの雨で強い濁り。もともとそれほど水色のよい川ではなく、魚の活性さえ高ければ、それなりに釣りになるだろうとたかをくくっていた。

が、この日は、ウッド製のミノーが足もとまで戻ってきてようやく確認できるくらい透明度が低い。「場所の選択をミスったかな」と思いつながら1時間ほどキャストを繰り返していると、透きとおった小さな流れ込み

の合流と濁りの際で40cmほどのニジマスがヒット。ダウンのアプローチで、しかもビックアップ寸前だったので、すぐにバテてしまったものの、何とか釣りになることが分かってひと安心。ルアーは、僕が本流で信頼しているスカジットデザインズのウッド製フローティングミノー「シーウォッチャー9cm」。

しかし、それからはアタリも何も無い。ポイントを移動しながらフロートイングからディーブミノーまで引き倒すも、目視できた生物は遡上してきたサケと、底を這いずりまわるウチダザリガニ、大きなドジョウの死骸だけだった。

明暗を分けたザリガニ

2日目。朝イチは魚のつき場が分かっていて、行き馴れたポイントに

見切りをつけて移動の最中、平日にもかかわらず、けっこうな数の釣り人や河川敷に停められた車を確認。釣りをしているかなりの足跡を見た。おそらく魚の活性が低いだけじゃなく、スレているのだろう。そ

う考えながら入った午後からのポイントは、スプーンだけとおすことにした。

最初に結んだのは、仲間内でニジマス有効カラーに定着している緑金オレンジ。いかにも魚が好みそうな瀬のかなり上流にキャストし、着底してから「コッ、コッ……」と、ロッドをとおして伝わる底の感触を得ながら川底を転がす。無反応とはいえず、絶好のポイントでは流し方を変えながらねばると釣れることが少なくない。ワレットを開き、「ひよっ」として、またコレか?と目にとまったザリガニカラーにチェンジ。

同じ瀬の少し下流側を転がすと、「グイッ」と懐かしい手ごたえが伝わってきた。合わせると同時に「バゴッ」と水面を割った魚体が太い。「ギョギョギョ」と猛烈な勢いでドラッグ音を

のように体高のあるオス。長さこそ50cmジャストでも、抜群の体型と最高のファイトに、何ともいえない充実感と達成感が込みあげた。

ラストはロクゴ

1尾でも満足だったのに、この日はビッグなおマケが待っていた。使命を果たして気が楽になったせいか、「まだイイの出るかも(笑)」と冗談を言いながら膝くらいまでウェーディングし、50mのランディング場所の少し上流から再スタート。何投目の根掛かりでヒットルアーをロストしてしまい、同じカラーのストックがなく、ザリガニカラー同様に輝きを抑えたタイプを選ぶ。友人のスベイクヤスターのヒットフライを真似てカラーリングを施したものだ。

いつものクセでルアーの動きを手もとで感じながら、辺りをキョロキョロと見回していると、自分の下流20mほど石の下で「コボン」という音とともに、大きな魚の背中が見えた。「サケか?」と思い、対岸に向けてキャストを繰り返すが、それっきり出てこない下流の背中がやつぱり気になる。「サケなら、もう1回くらい出るよな……」。石裏にスプーンをおすことにした。

魚の出た場所が立ち位置から真つすぐ下流だったので、クロスにキャストしたスプーンが魚の少し上手から真つすぐ転がるようにロッドワークで調整すると……「グンッ」と重量感。と同時に、ピンク掛かった大きな魚体が水面で翻った。

低活性か底生生物か…… スプーンの底力は輝かずとも

時折、水面を割りながら、ぐんぐん川を下って行く魚の先には長い瀬が待っている。少しだけドラッグを締め、流れが緩く水深のある方向に誘導。そこから下られないようにいなし、ランディングしようと思った。が、魚はもう少しでネットの届きそ

うな位置からなかなか近づかず、自分もその場から動けない……。といって、強引に寄せるとバレル確率は高くなる。

そこで、浮いてこない魚を一度上流側に誘導し、流れを利用して魚を浮き上がらせてすくおうと考えた。

響かせながら、マッチョなニジマスはどんな瀬を下っていく。「これ、これ。気持ちいいー」とフアイトを楽しみながらも、「コイツを取れたら取材は成功だ」と爽快感は使命感に変わる。特大のランディングネットですくったのは、まるでヘラブナ



50cmを超えてくると、アングラーは下流に上流にと走らされる。これがニジマス釣りの醍醐味でもある



こんな太い流れに潜んでいる魚のパワーは計り知れない。ロッドは8〜9フィート、ラインはナイロンなら8ポンド以上は必要

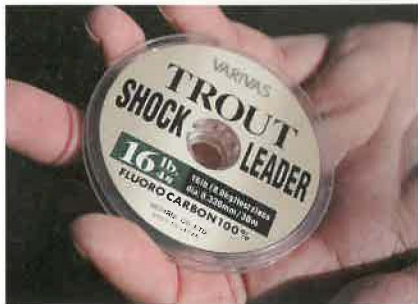


47cm。この1尾が当日のヒットパターンを教えてください

低活性が底生生物か…… スピーンの底力は輝かずとも



僕の本流用スピーンワレット。10g、14g、18gが入っている。右端が65cmのヒットルアー



ショックリーダーはフロロカーボン16ポンド。この素材でこの大きさなら、かなり信頼度は高い。メインラインはナイロン10ポンドで、ビミニストで三つ編みにして接続

1度目は失敗するも、2度目に成功。カメラマンとガッチリ握手。僕のなかで今期最大のニジマスは65cm、鼻の尖ったカッコいいオスだった。時間は午後3時過ぎ。やればまだ釣れたかもしれないけど、僕はもうお腹一杯。リリース後は1投もせず川を後にした。

立つ位置と底のとおり方

今回の取材時、唯一ヒットに持ち込めたルアーがスピーンで、川底を転がす釣り方だった。ブリブリと水中を引っ張ってくるミノーに比べ、流れと同速で流下させながら探るスピーンは、スレた魚や底にへばりついている魚、そして活性が低く移動スピードの速いルアーを追ってこないときに一番有効だと僕は思っている。川底を転がすのだから根掛かりの危険性は当然高いとはいえ、開け

た本流は意外に根掛かりを回避できる。何よりも、リスクを負うだけの価値がスピーンにはある。

釣りを細かくいうと、普通にドリフトさせるより「コツ」とか「モソツ」と川底の石や砂の感触を得た後、小さなロッドワークでスピーンをフツと浮かせた瞬間にヒットが多い。スピーンで底を転がす釣りは、ひと昔前のスピーン全盛期に釣りを始めたベテランアングラーなら普通のテクニクだろうが、ミノーからスタートしたビギナーにはちょっとしたコツが必要。次から、アプローチ別のメソッドとタックルについて解説する。

① アップ

自分から真つすぐ上流にキャストして底を転がす際は、リトリープでラインスラックを取りながら、まずはスピーンを底まで沈める。ロッド

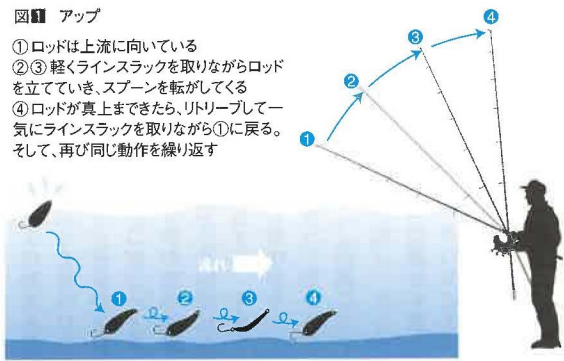


図1 アップ
①ロッドは上流に向いている
②③軽くラインスラックを取りながらロッドを立てていき、スピーンを転がして行く
④ロッドが真上まできたら、リトリープして一気にラインスラックを取りながら①に戻る。そして、再び同じ動作を繰り返す

が上流側を向いた状態から、スピーンの流下スピードに合わせて徐々にロッドを立てていき、ロッドが頭上まできたら一気にラインスラックを取って再びロッドを上流側に向けて。この動作を繰り返して、手前までスピーンを転がして行く(図1)。底を叩くスピーンは、底を叩く感じが分りにくく、根掛かりのリスクが最も高いのが難

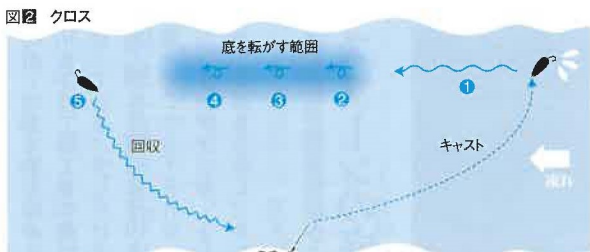


図2 クロス

立ち位置と並行する対岸付近を流す場合、ポイントよりも上流側にアツブクロスでキャストし、いったんスピーンを底まで沈め、ロッド操作で流れ方を調整する(図2)。このとき、ロッドは初めから立てた状態

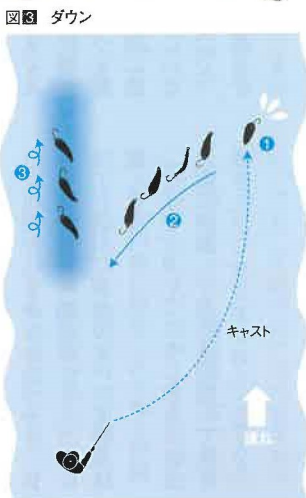


図3 ダウン

①ねらいたいポイントと同じくらいの距離で、離れた場所にダウンクロスでキャスト。着水と同時に一気にラインスラックを取りロッドを倒す
②ロッドを立てながら「グイーン」とポイントの上流までルアーを引っ張ってきて……
③イトフケが出るくらいのスピードで「スツ」とポイントに向けてロッドを倒していく。このとき「コツ、コツ」と底の感触がロッドをとおして伝わってくるくらいのラインテンションが保てていれば、スピーンは奇麗に底を転がっている

③ ダウン

自分の真つすぐ下流側を探るときは、真つすぐポイントめがけてキャストすると距離感がつかみにくい。そのため、まずはねらいたいポイントの少し脇にダウンクロスでキャストし、ラインスラックを巻き取ってロッドを寝かせる。そして、ロッドを立てながら扇状にスピーンを手前側へ引いてきて、ねらったポイントの真上までスピーンがきたら一気にロッドを寝かせ、スピーンを沈めて底を転がす(図3)。3尾目はこのパターン。なお、流れが速いポイント



スピーンで底を転がす釣りでは、ロッドを立てた状態で操作するのが基本

トでは、扁平な小型ジグを使用すると浮き上がりにくい。

● タックルは強く、長く

まず、ラインは強く。大ものを掛けたときに心強いし、根掛かりの回収率も高くなる。僕はナイロン派ゆえ8〜10ポンド、フロロカーボン16ポンドのショックリーダーを結んでいる。PE派ならラインの擦れを考慮し、1〜1.5号にナイロン16〜20ポンドのショックリーダーを長めに取るとよいだろう。これくらいの強度があれば、根掛かりしてもフックが伸びて戻ってくるが多い。

次に、ロッドは長く。アツブ・クロス・ダウン、いずれのキャスト方向でもロッドは立てて操作する。サオ先は高い位置に保持したほうがラインをさばきやすく、8〜9フィートを選びたい。なお、フックは断然シングル。そのほうが根掛かりを回避しやすい。アイはケブラーなどの繊維で作られているものがバレにくいと感じる。

地味なカラーを見直す

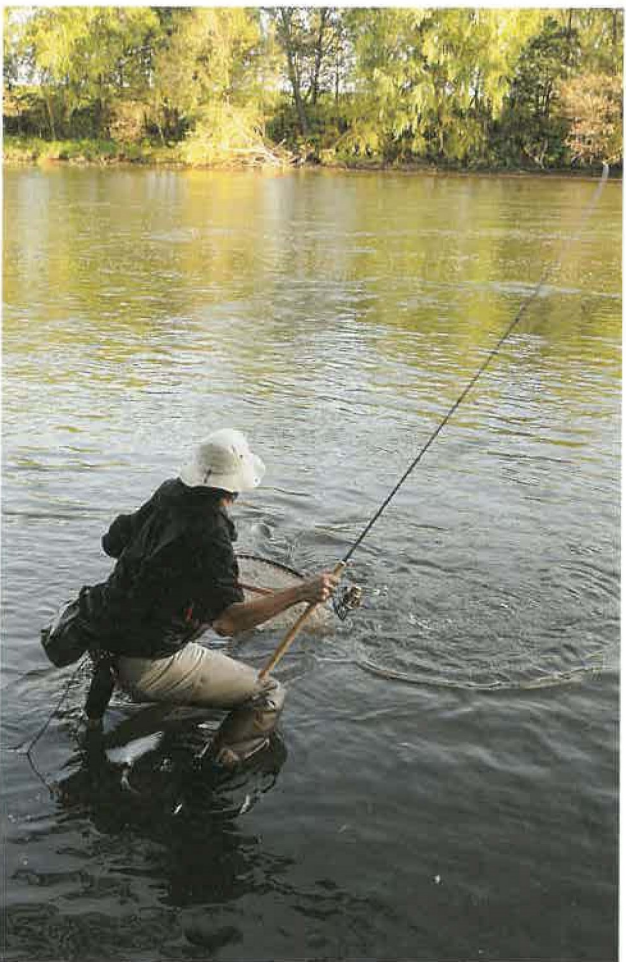
今回の釣行時、大活躍したのが茶色ベースのザリガニを模したカラー。ロスト後にヒットしたのも光を抑えた黒がベースだった。魚が底を流れるスピーンをザリガニと思っただのかどうかは分からない。でも、ザリガニやドジョウ、またはカワニナなど、底にエサとなる大きな生物が生息する川は、ルアーへの反応がよいことで知られる。

それらの生物は皆、色合いがとも地味で、小魚のウロコのように光を反射することはない。今回は前述したように、青銀や緑金オレンジなど一般的なカラーには反応しなかったのに、地味系に変えると劇的に釣果が変わった。特に朝イチに釣れた1尾目は、まったく同じラインを同じスピードで転がしたにもかかわらず、最初の青銀に見向きもせずザリガニカラーを食ってきた。青銀と緑金オレンジに反応しな

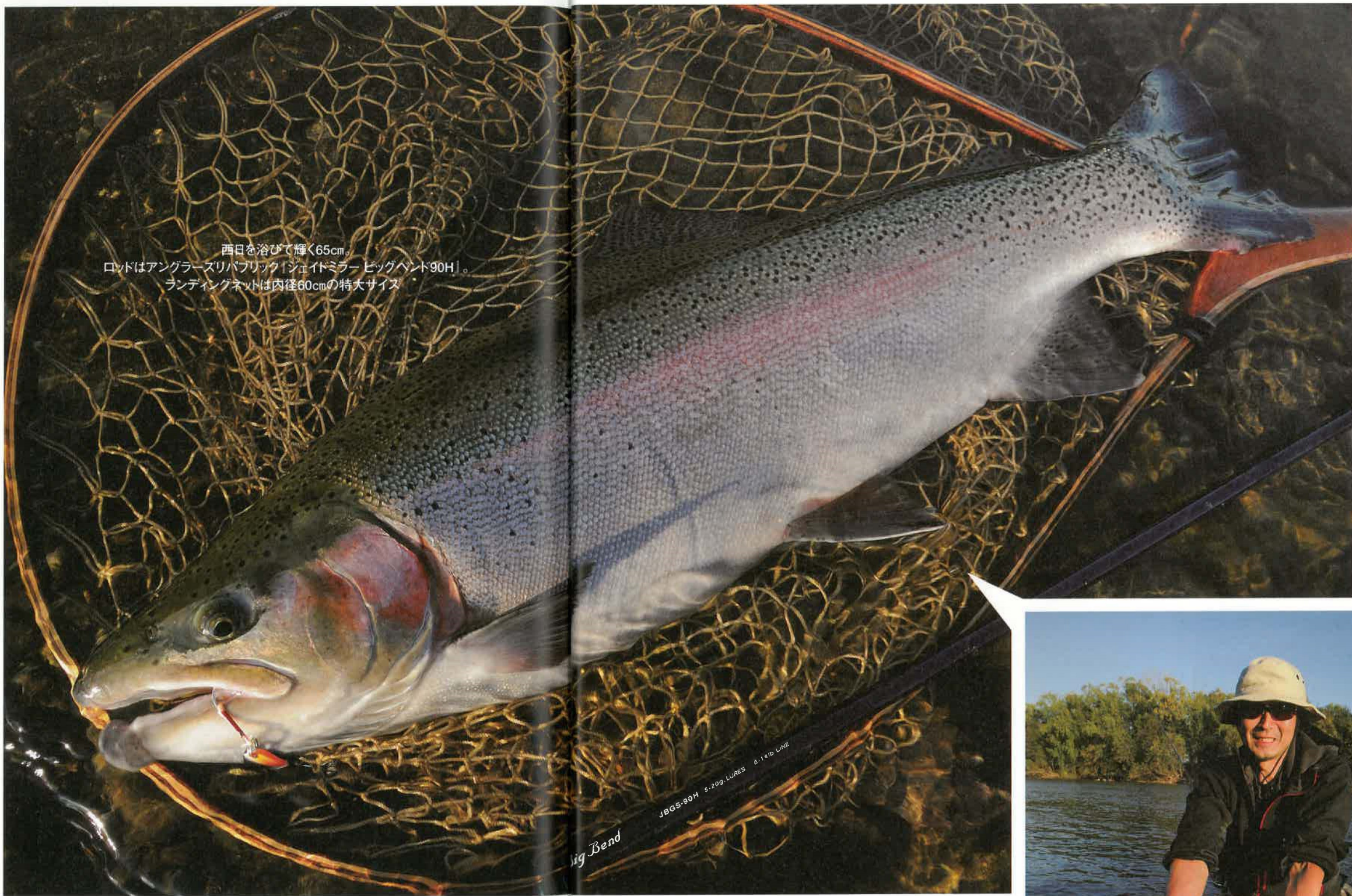
った理由として、僕は2つあると思ってる。まず、釣り人が多くて魚がスレていること。ショッブにスピーンやミノーが並べられている棚を少し離れて眺めると、最近はやたらにキラキラと光っているか、チャー

トリユースなどの派手なカラーばかり目につくはず。もちろん、そうしたカラーのほうが釣果は上がっている、カラーバリエーションに多く含まれているわけだが、使用している人が多いのも事実。人気河川で皆が

キラキラ・派手系を結ぶと、魚がそういう色や輝きにスレてしまうのは容易に想像がつく。次に、やはり底生生物の存在が無視できないこと。たとえば、よく見かけたドジョウやザリガニは、底を

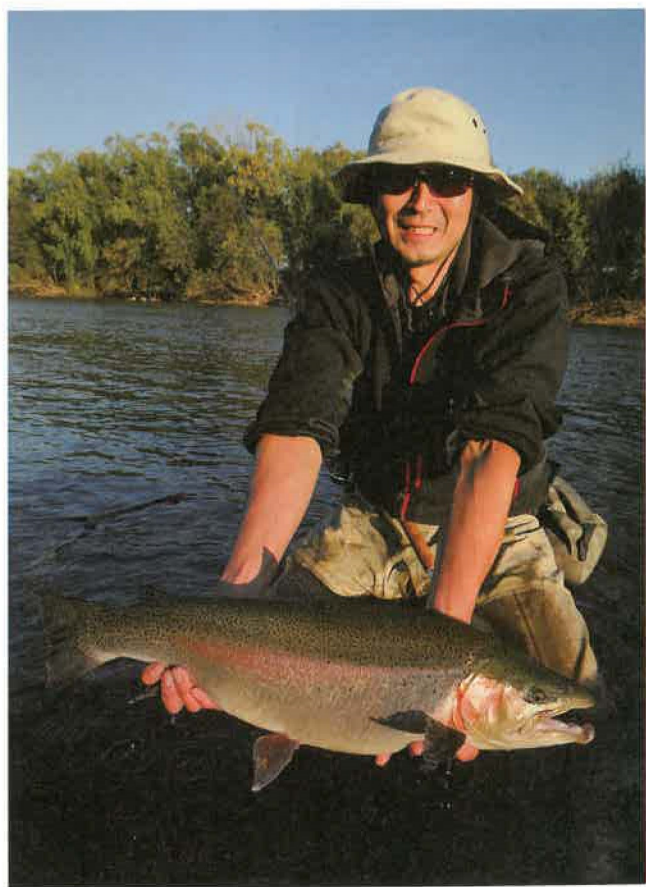


65cmのヒットシーン。写真は1回目のミスった瞬間。この後、すくう直前にカメラのメモリーカードが切れた……



西日を浴びて輝く65cm。
ロッドはアングラーズリバブリック「シェイドミラービッグベント90H」。
ランディングネットは内径60cmの特大サイズ

JBGS-90H 5-20g LURES 6-14lb LINE
Big Bend



長さだけでなく、顔つきや大きさも素晴らしい。文句なしのデカニジだ

に近いだろう。なかでも、ザリガニが石の隙間に入った跳ね上がったりする動きは、スプーンが石の隙間に挟まる感触を得て、根掛かり回避のためにロッドワークでスプーンを跳ね上げる動きとよく似ている。ちなみにカラーといえば、千歳川や尻別川では真っ黒いスプーンが効き、釣りあげたブラウントラウトやニジマスの腹を触ると、ゴロゴロした感触があることがある。おそらくカワニナやタニシに違いはない。知人のフライフィッシャーはそれを模した、大きめの黒いエッグフライを巻いている。

どれも確証がもてることではなくても、魚の食いが渋いときに限って、渋い色のルアーが活躍するもの。活性の変化が大きいこれからの時期は、派手なミノーと地味なスプーンというように、動きや色の明暗に差をつけた釣り方も面白いかもしれない。冬眠前、お腹一杯になる達成感を得るべく、シーズンラストの本流に通おう！

這うように移動するだけではなく、何かの拍子で底から「フワッ」と浮き上がるような動きを見せる。ドジョウであれば、エラ呼吸で間に入合わなくなると特有の腸呼吸をすべく、底から水面に一度浮上して再び底へ潜っていく。

ザリガニであれば、外敵から逃れる際、後方にキックバックして移動するが、その動きは「スッ、スッ」と意外にスムーズで素早い。そんなキックバック移動の先に石などの障害物があると、入り込める隙間があれば落ち着くも、なければ石の上部に跳ね上がる。この動きはドジョウやザリガニを模したクランクベイトやミノーの動きより、底を転がりながら上下するスプーンのアクション